

日本基督教団 東中国教区ニュース

NEWS

東中国教区
教区ニュース誌委員会
〒170-0045
倉敷市鶴形一丁目一五
倉敷キリスト教会館内
TEL 0864-21-1780

説教「BLMとキング牧師」

「わたしは主、あなたの神、あなたを
エジプトの国、奴隷の家から導き
出した神である。」(申命記五章六節)

琴浦教会 牧師 川上幹太



今、アメリカで起
きている大きな運
動の中心に「Black
lives matter、(略称
BLM) という標語
があるのをご存
じですか。「黒人の命も大事だ!」というこ
の言葉は、コロナ禍においても警察が黒人へ
の差別的取り締まりを行い、一人の黒人男性
を暴力によって殺したことに、黒人たちが
と連帯する人たちの怒りの表明として用いら
れています。

昨今の技術の進歩によって誰もがリアルな
情報を発信できるようになりましたが、アメ
リカでは今でも黒人差別が厳然として存在し、

権力によって不当に殺されているということ
を、世界は新たに認識することになりました。

今、起きている運動は、いくら訴えても改善
されることのない差別の現状に対して爆発し
た怒りを原動力とするものですが、日本のマ
スコミなどはただ暴動が起きている、恐ろし
い事態になっていると強調するのみで、問題
の本質に迫ろうとしないように思えます。
そればかりか運動の暴力性のみ取り上げるこ
とは、視聴者に「野蛮な人たちだ」「人権など
要求する者は悪だ」と思わせるだけで、むし
ろ差別に加担する行為ではないでしょうか。

私たちは、六十五年前にキング牧師が公民
権運動のリーダーとして選ばれたことを知っ
ています。彼は暴力を徹底して避け、平和的
手段を貫きました。表面的には、キング牧
師の非暴力の運動と、今起きているBLMは
まったく別もののように見えます。しかし第
三者が彼らに対して、「キング牧師のように
出来ないのか」などと言うべきではありません
。運動を進める大多数の人は、キングと同
じ精神で、平和的・人道的に訴えている人た
ちです。

目次

説教「BLMとキング牧師」……………1
今、礼拝を考える……………2
東中国教区の二〇二〇年度を歩み始めるにあたって……………4
この度の新型コロナウイルスに関して思うこと……………5
新任教師紹介……………6
教会紹介「高屋教会」「井原教会」……………7
「こんにち」のお部屋・編集後記……………8

8 7 6 5 4 2 1

キング牧師は演説『私には夢がある』のな
かで、アメリカ社会の不正を強く非難して
います。警察の暴力の嵐を経験して来た人た
ちがいます。刑務所に入れられた人たちが
います。彼らにたやすく罪人のレッテルを貼る
のは、苦難の現実を知らない人です。キング
牧師は苦難を経ってきた同胞に語りかけます。
「自ら招かざる苦難は贖罪的であると信じて
闘い続けよう。」すなわちその苦難は、人々
の身代わりとなって死なれたキリストの愛を
証しするものだ。それは、神はあなたたちの
の側におられるという宣言です。

十戒の序文の言葉は、神の本性を表してい
ます。神は奴隷の苦しみにある人を救わずに
はいられないという力強い宣言です。神はこ
の世の不正に怒られる方です。そして、私
たちにも、「あなたはどのようなのか」と問う
ておられます。もう一度キング牧師の言葉
を聴きましょう。「この信仰をもつてすれば、
われわれは共に働き、共に祈り、共に闘い、
共に投獄され、また、いつの日か解放され
ると固く信じつつ共に自由の為に立ち上がる
ことができるのだ。」

今、礼拝を考える

「コロナと礼拝について考えたこと」

同志社大学キリスト教文化センター

越川 弘英



新型コロナウイルスという出来事が教会の礼拝にどういう影響を与えたかということについて考えてみたい。とはいえ、何か結論があるわけではない。コロナ禍そのものが現在進行中の出来事であり、その結果をまとめたかたちで提示するのはこれからのことだろう。とりあえず今の時点で考えていること、考えてみていただきたいことを漠然とした感じで述べさせていたかどうかと思う。私の出席している教会の場合、コ

ロナの問題がクローズアップされてきた三月頃から教会の入口にアルコール消毒液とマスクが準備されるようになった。当初、注意しながら礼拝を継続するという方針だったが、週を追うごとに緊迫感が高まり、結局、四月二週のイースター礼拝から教会での集いは中止となった。その間、教会ではフェイスブックを通じて、牧師ひとりが礼拝堂で司式・説教する映像を配信する方法で信徒・関係者への対応を行った。そしてちようどペンテコステ（五月三十一日）から教会の礼拝を再開することとなった。現在、礼拝は一時間以内に収める、マスク着用、体調の悪い方は自宅で礼拝に参加（動画配信は継続している）、当面は聖餐は行わない（いつもは月一回程度実施）などを申し合わせとしている。

側面によれば、おおよそこうした経緯でこの一、二か月間の事態に対応した教会が多かったようである。コロナによっていつもの礼拝のかたちはまったく変わってしまった。一ヶ月間も教会に行かない。自分の家で礼拝に参加する。パソコンやスマ

ホの画面の向こう側に礼拝堂を眺め、牧師の声を聞く。おそらく長い教会生活、信仰生活の中で想像もしなかった経験をした方も多かったことだろう。

しかしこういったSNSによる礼拝を経験する中で、いろいろなことを改めて考えさせられたことも事実だった。たしかに礼拝のかたちは変わったが、ある意味で、変わっていないのではないかとすることも考えた。むしろ今までの私たちの礼拝の実態がよりくつきり見えてきた面もあるのではないかと思ったのである。

こうしたSNS礼拝において、何が中心的位置を占めていたかと言えば、私たちが属するプロテスタント教会においてやはり牧師の説教だったと思う。説教の部分だけを「礼拝」としてSNSで配信した教会がどの程度あったのか分らないが、私の印象では説教という要素に限ればSNS礼拝は十分その機能を果たすことが今回明らかになったように思う。これはつまりふだんのプロテスタント教会の礼拝における説教重視という特徴がSNSにおいて「強み」と

して作用したということだろう。

問題は説教以外の要素である。ここでは聖餐がいちばん大きな課題となるが、それ以外にも賛美歌、共同の祈り、「平和の挨拶」といった要素、つまり牧師や説教者から信徒・会衆へのメッセージという側面ではなく、信徒・会衆の応答と参与の側面である。あるいは双方向型のSNS（ZOOMなど）を用いて礼拝した教会もあるのかも知れないが、その場合も含めて、SNS礼拝において皆は果たしてパソコンやスマホの画面の向こう側で賛美歌を歌い、共に祈り、「平和の挨拶」を交わしたのだろうか。どんな気持ちで？

コロナ禍のもとでのSNS礼拝があらわにしたことは、私たち日本のプロテスタント教会の礼拝の多くが内包する、共同体性（礼拝に皆が共に与る）、応答性（積極的に皆が礼拝に関与する）、また礼拝における身体性を含む全身全霊による参与という面（裏返して言えば礼拝経験が知的側面に偏りすぎている問題）における弱さだったのではないかと思う。

あえて言えば、もしその教会でSNS礼拝がわりとスムーズに受け入れられ、会衆からも好評であったとしたら、それは上述したような礼拝の弱さの結果なのかも知れない。ここがらを単純化しすぎることに十分気をつけなければならぬが、思うに、礼拝における五感や全身全霊を使った参与、信徒の主體的な参与、「私たちの礼拝」といった共同体的感覚の弱い教会や礼拝の方が、SNS礼拝に対する適合性（親和性）はより高くなるのではないだろうか。

私はSNS礼拝を一概に否定しない。病気や高齢のためあるいは遠方にいるなどの様々な理由によって教会に足を運ぶことのできない方たちのためにSNS礼拝はひとつの牧会的配慮として有用な役割を果たすことだろう。あるいは外部向けの伝道方策として公開配信することにも意味はあるだろう。

しかしそれはキリスト教会が二千年間にわたって守りつづけてきたキリスト教の礼拝の代替となるものではないと思う。今回のコロナ禍は私たちの今までの礼拝の強みと弱みを

見つめ直すひとつの機会を与えてくれたのかも知れない。この経験のもとで、私たちが集まることの意味、共に歌うこと・祈ることの意味、「主の民のわざ」（レイトウルギア）としての礼拝の意味について、そして私たちの礼拝において変えてはいけないもの・変えなければいけないものについて、さらにじっくりと考えてみたいと思う。

＊私が編集主幹を務める教会向け季刊誌『Ministry』（キリスト新聞社）は次号（Vol.45）において、今回の新型コロナウイルスと教会の対応を特集し様々な角度から報告・分析する予定です。関心のある方はぜひ一読下さい

△執筆者紹介▽

一九五八年生まれ。同志社大学神学部、シカゴ神学校卒。巣鴨ときわ教会で牧師として遣わされた後、同志社大学キリスト教文化センター教授。礼拝学を専門とされている。著作『今、礼拝を考える』他。

東中国教区の二〇二〇年度を 歩み始めるにあたって

東中国教区総会議長 大塚 忍

東中国教区の諸教会の皆様。イエス・キリストにあるお交わりを心から感謝いたします。

二〇二〇年が始まってしばらくすると、わたしたちの世界では、新型コロナウイルスが猛威をふるい感染者が増え続けていきました。わたしが仕えている岡山教会でも、二月二三日に最初の対応策を配布し、その後二回注意喚起を促す文書を配布しています。岡山県内においても感染者が少しずつ増加し、四月一五日に一五人の感染（この時点では鳥取は一人）が確認されていました。教会の周りの店舗等が営業を休止していく中で、岡山教会役員会は四月一九日から五月一七日まで皆で集まる礼拝の休止を決定し、日曜日は牧師二人で礼拝をささげました。戦後の岡山教会の歴史においても礼拝休止は初めてのことです。玄関に「礼拝休止」の貼り紙をしたときには大きな痛みを感じました。東中国教区に属する教会の皆様も、不安を覚え、悩みながらも、様々な対応をとられて教会の交わりを守って

こられたのではないかと考えられます。

東中国教区では、日本基督教団からの「新型コロナウイルス感染症に伴う注意喚起について」、「声明」等を参考にさせていただき、注意喚起を促してきました。また感染拡大に伴い、常置委員会、三役会において五月二五日、二六日に予定されていた第六九回東中国教区定期総会開催の是非について協議し、総会の中止、議決権行使書による表決を決定しました。すでにお知らせしましたように例年教区総会で取り扱われる七つの議案について承認をいただいています。心から感謝いたします。

教区は六月一日に蕃山町教会において、第六九回総会期第一回常置委員会を開催しました。「新型コロナウイルス禍における特別措置に関する件」を協議し「東中国教区における集会開催にあたってのガイドライン」を策定し、また二〇二〇年度の負担金から一〇%減額すること、各地区からヒアリングを行い必要な減免措置を執ることなどを確認しました。また、議決権行使書【議案第八号】の承認に基づき常置委員会の面談を経て、高根祐子教師（蕃山町教会）の准允式を執行することができたことは大きな喜びでした。また、今後は感染拡大防止のためにインターネットによるオンライン会議などに

よって常置委員会を開催することなども話し合われました。わたしたちの教区は、第六九回定期総会において議案第七号「東中国教区宣教強化のための教会強化特別資金運用規程改定に関する件」、議案第一三号「将来的東中国教区宣教に関する件」を上程する予定でした。この議案は、将来の東中国教区の宣教にとって非常に重要な内容を含んでいます。新型コロナウイルスの今後の感染状況等を見極めながら、上記の議案を取り扱う臨時総会の開催について検討しています。

教区は、岡キ災、YMCAせとうち、日本基督教団と連携しながら二〇一八年一二月から西日本豪雨の被災地に「まびくら」を設置し活動をおこなってきました。まびくらも四月から六月半ばまで活動を休止してきましたが、現在は活動を再開しています。まびくらでの活動は次年度の三月末までを予定しています。この活動を覚えて祈りによってお支えいただければと思います。

しばらく、各教会ともに厳しい現実の中を歩むこととなりそうです。連帯の思いを強めながら、この時を乗り越えていきましょう。ご要望、ご意見等がございましたら、ご遠慮なくお申し出ください。神様の支えと祝福を祈りつつ。

この度の

新型コロナウイルスに

関して思うこと

蕃山町教会 牧師 服部 修

新年に入ってから、新型コロナウイルスの猛威について語られ始め、今や世界中をその脅威が覆い尽くし、不安が至るところに満ちている現状を私たちは目の当たりにしていますし、教会もまた対応に苦慮しています。

この状況の中で思われることがあります。それはパスカルが『パンセ』の中で語った「人間は考える葦」の意味としての「考えることを止めない」ということの大切さです。

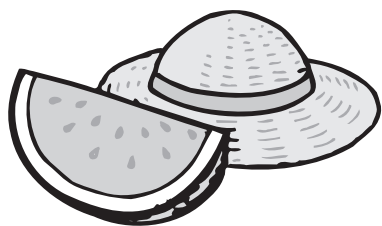
新型コロナウイルスの感染拡大予防、という視点で、しばしば二つの意見が述べられます。「何よりも命が優先」ということと、「命も大事だが信仰も大事」という二つ。特にクリスチャンである私たちはこの二つの言葉の間に立ち、いずれの言葉も「正しい」ことを知っています。「何よりも命が大事」であることは当然であり、神さまか

ら与えられた命を大切に用いて生きることは、神さまの御心に適うものです。しかしそこで思考停止すると、生き延びることが至上命題になり、信仰や救いは生き延びることの下位に置かれてしまいます。しかし教会の歴史を通じ、そればかりではないことを知っているから「命も大事だが信仰も大事」と考えるし、例えば迫害下にあつて、イエスさまが語られた、「体は殺しても魂を殺すことのできない者どもを恐れるな」(マタイ十章二八節)に慰めを見出してきたのです。しかしそこでも思考停止してしまうと、信仰があれば病気になる、だとか、信仰心で病気を退散させる、といった異質なものに変容する危険をはらんでいます。

そうしてみますと私たちはいつでもぎりぎりの判断をしていると言えます。そして私たちは正解だけしか許されないと怯えています。しかし信仰の判断はいつもぎりぎりです。一歩間違ったら奈落の底、と言えるような稜線の上を歩んでいるのが私たち信仰者です。だからこそ、考えることを止めず、他者とあるいは自分の心と、そして何よりも神さまと対話しつつ生き、判断す

ることが重要だと思うのです。そして主の前では、正解だけがすべてではなく、失敗もまた赦しの御手の中にあると信じているからこそ、ぎりぎりの判断への不安を抱えながらもそれを続けるのです。何が本当に神さまに喜ばれるのかについて考えることを止めないことこそが、尊いものであることを思わされます。

新型コロナウイルスの禍は私たち自身の信仰を見つめ直す一つのきっかけになっているのかもしれない。そうであるならば、私たちはこの禍の先にある希望をしっかりと見つめながら一つ一つの言葉を語り、その言葉の上に立つて生きたい、ということを考えさせられるのです。



新任教師紹介

「着任のご挨拶」

蕃山町教会 高根祐子



このたび蕃山町教会に伝道師として着任いたしました高根祐子と申します。サラリーマン生活を経て献身し、四月に岡山に参りました。関東を離れて暮らすのは初めてです。二〇二〇年も半分が過ぎますが、補教師試験や引越の準備に新型コロナウイルス騒動が加わり、怒涛の今年前半でした。岡山に着いてみれば外出自粛で出歩けず、家庭集会などもすべて休止で、そろりそろりとスタートを切った感じです。人の顔を覚えるのが苦手なところへきて、誰の顔も三分の二がマスクで覆われていて苦戦していますが、あたたく受け入れていただいて感謝です。誰もが安心して礼拝に集い、交わりを

持てるときが一日も早く戻ってきてほしいと心から祈ります。今までにない不安や心配の日々がいつまで続くのかわかりませんが、与えられた場でできるかぎり仕えてまいりたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

「命どう宝」

天城教会 牧師 吉田 慈

私は、海なし県、山々に囲まれた群馬県の出身です。

茨城県で教員としてスタートし、水戸の教会・保育園で働き、福島教会・保育園で働き、神奈川の教会、京都の教会・保育園で働き、家族四人で参りました。

水戸で被災し、石巻へと通い、偶然縁があつて、福島の教会・保育園で働かせて頂きました。茨城・福島では震災と原発事故を、身を持って経験させられました。

そして神奈川。軍用機が我が物顔で、空を飛び回り、教会の真上をちようど滑空し、基地へと降りていく日常。そんな中で、沖縄とも繋がりました。憲法で守られていない、米軍最優先、基地の中に人々の暮らしがもう七十五年もある異常さ。

そんな人々の暮らしが、歩みが、人生が、脅かされるような、問われているような、場所に偶然赴任しながら来た私の歩みは、まさにいのちそのものを愛でる・尊ぶ・守る・大切にすることに他なりませんでした。これからもそうであり続けたいと思います。

△命どう宝（ぬちどうたから）・・・命こそ宝▽



吉田慈教師～ケニアのこどもたちと

教会紹介

・高屋教会・

上野瑛二郎

高屋教会は、百十四年前の一九〇六年、現在の地に設立されました。建物は内外装多少の補修は施されましたが当時の姿のままで、県の重要建造物に指定されています。

また、二〇〇六年に発行された百周年記念誌を開いてみますと、当時の同志社大学総長の海老名弾正氏や、聖路加病院の名誉院長だった日野原重明さんの父上と思われる、広島女学院院長の日野原善輔氏が講演に来られたとの記載がありました。

地方の町

の宿命でしょうか、信徒の子孫がほとんど都会に出て行ってしまつて、現在の陪餐会員はわずか二名になってしまつて、礼



高屋教会

拝も井原教会との合同礼拝という形で守つてきているのが実状です。そんな中でも、歴史ある教会の姿を守るための努力は続けなければと、二百坪近くの教会敷地の整備美化に務めています。近隣の住民の方々も、地域のランドマークとして親近感を持ってくれていますし、夜になると会堂玄関の電灯が世の光として明々と点いて、歩く人たちの足元を照らしています。

・井原教会・

池田義明

今年ちょうど百周年という記念すべき年となり、取組んでいるところです。井原教会は一九一〇年組合教会井原講義所として発足しましたが、そもそもの始まりは一九〇一年高屋出身の岡本清兄が先鞭をつけられたことによります。当時から高屋教会と合同で礼拝していることもあって、井原教会の創立としてはつきり線引きすることは難しく、又、独立した教会でもありませんでした。今現在も両教会は兄弟のように手を取り合つて進んでいます。

ふりかえってみますと、十四名の歴代牧師の下、教会員は一丸となつて走つてき



井原教会

ました。一九八二年には会堂の傷みも激しく、祭壇、床、天井、壁などの大がかりな修築をしました。二〇〇九年には屋根の瓦がずり落ちそうになり、全面葺替えをしました。更に二〇一四年にはトイレを和式から洋式に代えました。こうして先生方をはじめとして諸兄姉の働きが進められました。二〇一五年からは阪西先生の下、現住陪餐会員男二名、女五名、計七名ですが、礼拝担当も順番を決めてやっています。高屋教会の上野さんもその中の一人です。一人一人与えられた賜物を生かし奉仕しています。

記念行事として計画しておりました祝賀コンサートですが、その昔クリスマスにはコーラスグループの人達やギターアンサンブルの人達と楽しんでおりましたが、その再現を願っておりましたが、止むなく中止になり残念に思っています。

「こんにちは」のお部屋

「変えられること」を喜びとする

SH防止小委員会副委員長 金子直子

母を亡くした。一昨年十月のことだ。母とはよくジェンダー論を闘わせた。ジェンダーとは「らしさ」を規定する慣習や心理をいう。九十歳半ばの母にとって、男らしさ女らしさの規範は、信仰と相まって強靱だった。

「教団性差別問題連絡会」は今年も全国会議、定期総会、セクシユアル・ハラスメントに関する協議会の三本柱ともいえる集会を二日間にわたって開催した。第十六回目となる今回、倉敷キリスト会館を会場とし、全国から五七名、十二教区一

団体が参加した。連絡会の母体は、二〇〇二年まで十四年間活動した教団性差別問題特別委員会だ。日本基督教団



変わっていくことこそ～母像～

では当時、「性の搾取などの問題を教会の宣教の課題として、それぞれの場で具体的に取り組むこと」が提案され、今日に至るまで連絡会の活動として継承されている。

大会テーマ「変わっていくことこそ性差別主義を問い続ける」を掲げ、今尚現存する教会内性差別の実態に改めて向き合い、為すべきことをなしていこうと再認識した。

編集後記

「追悼」
二〇二〇年一月二十一日、玉島教会の主任牧師である阿部雄次牧師が召天されました。阿部雄次牧師の生涯の尊い働きを憶えます。御霊が祝福の内にありますよう、またご遺族、玉島教会の皆様の上に主にある慰めをお祈りいたします。

刷り込まれた偏見からの解放を新しい視点を手に入れることで実現させ、母は旅立った。私たちを変えてくださるのはただ主のみと信じて。

新型ウィルスは世界規模的災害となり、教会の営みや礼拝という場においても多大な影響をもたらしています。この難事の中で多くの方が教会・礼拝について考えを巡らせて来られたのではないのでしょうか。今号では礼拝学など実践神学の分野を専門とされた越川弘英教授に寄稿していただきました。また、教区の営みも各所で例外的対応をしている中、教区議長よりコメントをいただきました。ただ主の導きを祈り願いながら、小さな業でも愛をもって行う日々の歩みを求めたいと思います。(W)

★ハラスメント相談窓口★

毎月第三水曜日 午前九時～午後九時
電話番号 ○九〇―一三三〇―一八七三〇

